

渡邊正裕著「10年後に食える仕事、食えない仕事」東洋経済新報社 2012年2月16日刊を読む

「頼れるのは自分だけ」の社会で

1. 2011年12月は、スペイン・マドリッドに赴いた。失業率20%超で、若者(16 - 24歳)に至っては46%という社会はどんなものなのか、それは本当なのか、現場取材するためだ。10代、20代、40代、50代と幅広い層のスペイン人にじっくり話を聞くと、この数字は実感どおりだと皆が言ったが、街は思ったより荒れていなかった。
2. 日本と似ている点は、正社員の解雇が難しい一方、当局の取締りが追いつかず違法行為(賃金を支払わない等)も多い点と、親世代が裕福で持ち家率が高く、同居すれば住む場所に困らない人が多いという点だった。
3. 逆に日本とまったく異なる点は、ラテン系の楽観的な性格と、"ファミリー福祉"である。「どうにかなるさ」といった根拠のない展望を皆が語っていたし、親戚のおじさんがやっている家業を手伝いながら勉強または職業訓練に通っている、といった類の話をする人が多かった。
4. 日本人は相対的に悲観的で、自分を責めるので、失業が自殺に直結する可能性が高そうだし、日本社会はサラリーマン化が急速に進んだこともあって「一族の家業」でとりあえずの職を得るといったセーフティネットも激減している。つまり、いざ同じ高失業率になったら、日本社会はぜい弱で、一気に暗い雰囲気となり、社会が荒廃するだろうな、と感じた。
5. 一足早く財政危機が訪れたヨーロッパ諸国と同様、いやそれ以上に借金を作り過ぎてしまった日本では、もはや国の福祉には頼れそうにない。ファミリー福祉もあてにできない。頼れるのは自分だけ。財政危機が表面化して雇用が縮小しても、自分で職を得て生き延びるしかないのだ。まさにそういった状況に突入しそうな日本人の仕事選びを、グローバリズムの進行という視点から論じた。

P219 ~ 220

[コメント]

正に一寸先は闇の日本や世界でどう生きていったらいいのか。自分の力で日本や世界の未来を読み解き、自分の力でそれらに備える以外はないのか。そのために、今、何をしたらいいのかを考えるきっかけを本書は与えてくれる。是非、御一読を。

- 2012年5月6日 林 明夫記 -